

平成29年11月4日(土)

老球の細道368号

連覇を成し遂げるには

会津バスケットボール協会 室井 富仁

365号でプロ野球「楽天」の優勝に関連して元巨人軍の監督・川上哲治氏のことを書いた。偶然にも昔の新聞記事に楽天の星野監督と川上哲治氏のことを書いたものがあった。

【今回の相手は入団を望んだが、かなわなかった巨人。以来、ライバル心をむき出しにしてきた「生涯の宿敵」だ。40歳で初采配した中日時代から背番号は77。「V9」を達成した巨人の川上哲治元監督にあやかる。現役引退後、評論家時代に親交を深め、一緒に座禅を組み、勝利にこだわる姿勢を学んだ。監督業の「師」と仰ぐのは川上氏だけだ。その恩人がシリーズさなかの10月23日に93歳で逝った。リーグ優勝した後、「最後までがんばれ」とハガキをいただいた。日本一になる姿を見てもらいたかったが、間に合わなかった】

星野元監督に生涯の「師」と仰がられる故川上氏はどれだけすごかったのか。『続・悪の管理学』「道にのって勝つ」の章で、9連覇11回優勝について語っている。

「1066勝したとはいえ、勝つためにこれといった秘策はない。しいていえば、プロ野球人としての自覚を失わないことの一語に尽きる。自覚とは、プロとしての心技の充実と、チームプレーの精神をふまえ、正々堂々とした野球を目指すこと」。

川上監督はチームプレーを重視するために、いかに優れた個人プレーをしようと、チームに対する貢献度が低い選手を評価しなかった。マスコミでもてはやされ、その気になっている選手をチームのガンであるとズバリと斬っている。

同じようなことを、アメリカ大学バスケットボールで全米大学選手権大会優勝10回、そのうち7回連続優勝に導いた元UCLAヘッドコーチ・ジョン・ウッデンも言っている。連覇のため六つの条件として、ごくあたりまえのことをあげている。

①勤勉に努力すること。②情熱を持っていること。③精神面、肉体面、道徳面でのコンディションが万全。④基本に忠実。⑤チームに貢献する気持ち。⑥細部にまで注意。

また、こんなことも言っている。

「最高の選手たちを集めても最高のチームができるとはかぎらない。才能のある人間であってもチームプレーができない場合、その人物は最終的にチームに害を及ぼす」

そのようなわがままな選手には次のような警句で注意をするという。

「才能は神から来る・・・謙虚であれ。名声は人間から来る・・・感謝せよ。うぬぼれは自分から来る・・・用心せよ」

野球の川上、バスケのジョン・ウッデン、この二人の偉大な指導者に共通していることは、チームプレーを重視し、個人のわがまは絶対許さないということである。このことこそ前人未踏の連覇ができた条件なのである。

「人は転ぶと坂のせいにする。坂がなければ石のせいにする。石がなければ靴のせいにする。人はなかなか自分のせいにはしない」

ユダヤの古い格言である。連覇するチームにはいつも優れた選手がいるからだと言われるが、それだけではない。人材(素材)を勝敗の言い訳にしている指導者は即刻コートを去るべし。言い訳無用!あたりまえのことを鬼になって徹底するのみである。